

第7課「キリストにあやかる」

聖書箇所：ローマの信徒への手紙 6 章 1-14 節

主題聖句：このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、
キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

(6 : 11)

本日の箇所は、常盤台教会でバプテスマ式が行われる際に、司式が読んだり、交読文として唱和したりする部分です。バプテスマという、受けられる方にとっては大きな人生の節目であり、教会にとっては最大の喜びである瞬間に、その本質的な意味を思い起こさせる、大切な箇所と言えるでしょう。

人がいかにしてクリスチャンとなるか、そのために必要な過程は何か。キリスト教の中にも様々な考え方があり、全身を水につける浸礼（バプテスマ）がすべての教会で行われているわけではありません。しかしそれが浸礼であれ滴礼であれ、何らかの象徴的な行為を大切にしている点では多くの教会が一致します。それは、信仰を持たずに生きる人生と、神に従い歩む人生は、全く異なっているからです。なんとなくクリスチャンになる、気が付いたらクリスチャンになっている、ということではなく、今日これをもって新しい人生を主から頂く、という重大な転換点。その象徴として浸礼等が行われ、その日を第二の誕生日と呼んだりもするのです。

では、その「神に従い歩む人生」と「そうではない人生」の間にある違いとは、何なのでしょう。あらためて言葉にしようとなると、少し考えこんでしまうかもしれません。本当はここでいったんショートメッセージを止めて、皆さんにお聞きしたいくらいです。きっとそれぞれの、信仰の証しが表れてくると思います。

パウロはこの違いを、常に「罪」と「義」の対比で捉え、語っています。罪とは、必ずしも犯罪的な行為や道徳的な逸脱のみを指すわけではなく、神から目を逸らした生き方そのものが罪と言えます。そして義とは、二度と一切の罪をおかさない人間になったり、過去の過ち全てが「なかったこと」になったりするのではなく、神を仰ぎ見る生き方そのものが義なのです。そして、罪から義へと生まれ変わるには、キリストであるイエスに結ばれる必要があると語っているのです。

今日の箇所の手前で、パウロはアダムとイエスについて語っています。最初の人間アダムが罪を犯したことにより、全ての人間は罪と共に生きることとなりました。たった一人の人間によって、その先全ての人間が罪に定められたのです。であれば、キリストであるイエス、神の子であるイエスによってもたらされた義は、それを遥かに上回り、多くの人々を救いに導くと言うのです。

イエスの十字架による贖いが、その出来事より手前（過去）にだけ作用するのではなく、その先（未来）にまで波及していくということ。イエスさまは果たしてどこまでそのおつもりがあったのかなあ、人間が後から勝手に意味づけをしているだけではないかなあと考えてしまったことが、個人的にはあります。しかしイエスさまご自身のお言葉や、パウロたちのこうした解き明かしを読むと、その思いがいかに間違っているか、よく分かります。十字架の贖いは、確かに今を生きる私たちにも及んでいます。

6 章の冒頭、「恵みが増すようにと、罪の中にとどまる」というのは、体をできるだけ泥で汚しておけば、石鹸がいっぱい貰える、だから敢えて目いっぱい汚した方がお得だ、というような発想でしょう。また、人間は罪を犯し続けてしまうので、それを洗い続けなければいけない、その歩みに終わりはない、という考え方も背後にあるはずです。これでは結局、

罪に支配された人生のままです。私たちはイエスさまの十字架を通して、罪に対して死にました。人間の弱さを思うとき、罪を全く犯さなくなった、とは言えないでしょう。しかし罪の意識だけに囚われた人生から解放された、という意味で罪に対して死に、新しい命に生きるのです。イエスさまの死と復活が、私たちにその新しい生き方を示してくださったのです。だからこそ、バプテスト教会は浸礼を大切にします。罪に対する死と、新しい命への復活を表すためです。

80年代から90年代にかけて人気を博したロックバンド、THE BLUE HEARTSの代表曲「青空」にはこのような歌詞があります。

「神さまにわいろを贈り 天国へのパスポートをねだるなんて 本気なのかい？」

直接的にキリスト教を批判しているかは分かりませんが、頭の片隅にはあったのだと思います。私がこよなく愛するバンドなだけに、この歌詞には何度か心を揺さぶられてきました。しかし何度考えても、信仰を持つことが「天国へのパスポート」を「ねだる」ためにしているとは思えませんでした。あえて喩えるならば、神へと続く方位磁石を受け取る、ということが一番近いかもしれません。

さまよい続けた人生から、決して変わらない指針を受け取り、自分の歩むべき道筋を見出すこと。再び迷子になることも時々、いや、しょっちゅうかもしれません。それでも、この方位磁石を手放さずに生きればまた正しい道に帰ってくることができる。さまよい続ける不安とは、もう無縁です。

この平安を、一人でも多くの方と分かち合っていきたい。それが教会の願いです。だからこそ、誰かがバプテスマを受ける姿に心から「おめでとう」と感じるのです。

パウロは、私たちが自分の体を「不義のための道具」とせず、「義のための道具として神に献げなさい」と語ります。どうすればその言葉通りになるのか、これもまた考え出すと難しい問いです。しかし、まだ神さまを知らない人々に伝道し、バプテスマへ、そしてその先に待つ喜びの人生へと導くこと。これは間違いなく、神さまの御用を成すことでしょう。バプテスマはその見た目もあって壮大な印象を人に与えますが、「この方位磁石は便利ですよ！」と勧めるような、よい意味での気軽さも大切にしながら、神さまのお手伝いをしていきたいと願います。

～分かち合い～

- ◇ バプテスマを受けている方はその前後、受けておられない方は教会にいらっしゃる前後で、生き方にどのような違いを感じますか。
- ◇ 「クリスチャン」をいわゆる「聖人君子」のように捉える方が、教会の外にはいらっしゃるように思います。こうした捉え方に、あなたはどうか答えますか。

(担当：郷 健人)